

## 横山ゆずり作 「受験 パート4」

<前編>偏差値よ さようなら

(効果音) (講堂での生徒集会。全校生徒の拍手)

遠藤操 ただいまのは、生徒会長に立候補した高野君の応援演説でした。続いては、初期に立候補した2年D組、皆川久子さんです。

(効果音) (拍手)

皆川久子 わたしは、今度書記に立候補しました2年D組の皆川久子です。この青春中学で今まで2年間過ごし、学級委員や学年委員会の副会長を務めた経験から…  
(FO)

操モノローグ あーあ、あんなに緊張しちゃって。手が震えてるじゃない。あたしも去年あだったのかなあ。懐かしいな。もう1年もたっちゃったなんてねえ。

操ナレーション あたし、青春中学3年B組、遠藤操。こう見えても生徒会長。今日は、ちょうど次の生徒会長を決めるための、立候補者の立ち会い演説会。それで、生徒会長のあたしが、司会進行役を務めているわけなんだけど…。こうしていると、1年前、やる気に燃えて、生徒会活動に飛び込んでいった自分の姿が、まるで昨日のようによみがえってくる。

(音楽) (ブリッジ)

(効果音) (教室のドアが乱暴に開く音)

男子 おい、やったぞ 遠藤！ 今、当選確実が出たぞ！

(効果音) (生徒たちの歓声)

生徒たち (口々に)「やったね」「おめでとう、操」「おめでとう」

女子 A 操、やったね！ 生徒会長当選おめでとう！

女子 B 絶対受かると思ってたよ。青春中5年ぶり、久々の女子会長誕生だね。

操 ありがとうございます。みんなのお陰だよ。本当に、どうもありがとうございました。

(効果音) (歓声。拍手)

女子 A やっぱ、演説会の時の公約が効いたよね。ほかにだれも「校則を改正します」なんて言わなかったもんね。先生たちもビックリしてたし。

女子 B だけど、これからが大変だよ、操。だって、公約どおり、今のガチガチの校則を変えていかなくちゃなんないんだから。

操 うん、分かってる。だからこれからも、みんな協力、よろしくお願いします。

(効果音) (拍手)

ナレーション こうしてあたしは、生徒会長として歩み始めた。そもそも打ちの学校は、校則が厳しくて有名だった。服装、髪型から始まって、持ち物、下校後の生活まで、細かく規則が決められていた。そして、それを生徒に守らせるために、違反者へ

の罰とか言って、更に校則が増えていく。スカート、ヒザ下何センチ、前髪はマユ毛から何センチなんてことまでいちいちチェックされて、規則にがんじがらめにされたあたしたちは、もうパンク寸前だった。“もっと自由な中学生生活が欲しい”、そんな思いから、あたしは、生徒会活動に立ち上がったのだ。それからは、本当に目が回るような毎日だった。

生徒 (校門前での登校時の署名運動。口々に。)  
「署名お願いしまーす」「校則改正のための署名に、ご協力お願いします」

(効果音) (教室のドアの開く音)

操 失礼します。あたしたちは、生徒会の「校則を考える委員会」の者です。学活の時間ですが、ちょっと話を聞いてください。あたしたちは、この学校で中学生としての3年間を過ごすわけですが…(FO)

副会長 (PTAの集いで)すみません、おばさん。生徒会のアンケートにご協力お願いします。

母親1 何？ あら、「中学生らしい身なりについてのアンケート」。生徒会でこんなことしてるの？

母親2 あら 何？ へえ。「制服着用について。①登校時はもちろん、下校後も、外出の際はいつも制服を着用すべきである。②登校時以外は自由でよい。③…」

操 無記名でいいですから、書いてもらえませんか？(紙を渡す)

母親3 へーえ、面白そうね。「髪型について。男子の場合。①全員が五分刈りにすべきである。②耳にかからない程度。③えりに付かない程度。③パーマ、長髪も含めて、全く自由でよい。」そうねえ、②かしらね。

母親2 あら、あたしは③だわ。

母親3 パーマとかは、やっぱいねえ。

母親2 でも、全員坊主頭ってのは、行きすぎよねえ。

男子 先輩、僕たちも署名集めるの協力します。

操 ほんと？ やってくれる？

男子 じゃ各家庭を回って、父母のアンケート、頼んできます。

操 ありがとう。助かる。

副会長 会長、新聞委員会のほうに言っときました。次の学校新聞と学年便りに、僕たちの運動の記事、載せてくれるそうです。

操 分かった。そしたらあとはPTAのアンケートがそろったら、集計して、職員会議に出してもらおう、と。

ナレーション こうして、あたしたちの「校則改正運動」は、生徒だけでなく、PTAまでも巻き込んで、ついに先生方を説き伏せ、わずかではあるが、服装と持ち物についての項目を緩めることが認められた。本当に忙しくて、それに生徒の中にもなかなか理解してくれない人がいたりして、つらいこともあったけど、あたしの中学生

活の中で、一番一生懸命になれた、充実した一年だった。

(効果音)

(大きな拍手)

副会長

おい、遠藤。

操

え？

副会長

「え？」じゃないよ。何ポーっとしてんだよ。演説終わったぞ。

操

あ、いけない。ただいまは、書記に立候補した2年D組の…(FO)

先生

では、これで学活を終わりにする。あ、それから遠藤。

操

はい。

先生

あとでちょっと職員室に来なさい。では以上。

(効果音)

(ガヤ){職員室のドアをノックする音}

操

失礼します。

先生

ああ、遠藤か。まあそこに座りなさい。

操

はい。あの一、話ってなんでしょう？

先生

うん。おまえは高校の進学のことをどう考えてる？

操

「どう」って、先生、この間の面接では、光陽女子大付属から、卓球部の関係で、推薦してもらえるっていうんで。

先生

そう、確かにそうだったな。お前は成績も優秀だし、県の卓球大会で2回入賞してるんで、特待生として迎えたいと光陽大付属で言ってきたのは事実なんだが…。

操

ダメになったんですか？ あたしの成績じゃ足りないんでしょうか？

先生

いや、そうじゃないんだ。成績の点では、遠藤は平均 4.3、まあ問題ないんだが…。

操

じゃあ、卓球のほうですか？ あたし、優勝はしたことないし、今年は生徒会のほうが忙しくて、大会出られなかったから…。

先生

いや、卓球じゃなくて、問題はその“生徒会”のほうなんだよ。

操

生徒会…ですか？

先生

ああ。実は、この間、光陽大付属から問い合わせがあつてな、推薦入学希望者の、つまりお前の、その、生徒会長時代の活動について、詳しく知りたいと言うんだ。それで、だな、教頭が、例の校則改正の件で、「この生徒は、全校生徒のリーダーシップを取って、非常に積極的に活動した」といろいろしゃべってしまったらしいんだよ。

操

「しゃべってしまった」って…。別に隠すことじゃないと思いますけど。

先生

それはそうなんだが、あちらさんは、まあお嬢さん学校として自他共に認める名門私立大学の付属だから、あまり、その、活動家は好ましくないらしいんだな。それで、この件については、白紙に戻したいと言ってきたんだ。

操

そんな。それじゃ、あたしの推薦入学は取り消してことですか？

先生 いいにくいが、まあ、そういうことだ。わたしとしても非常に残念だが。しかし、ここで抗議を申し入れたりしても、次の年度の我が校からの受験生をシャットアウトされたりしたらかなわんからな。まあ、お前には気の毒だが、幸い、まだ11月だ。お前の実力なら、いくらでも行くところがある。さし当たって、どうだ、光陽と同じくらいの偏差値だと、この辺だな。県立高嶺、南、私立だと、偏差値 60 から 67 くらいの範囲で、高尾学園、西山大付属、それから…。

操 先生、偏差値が同じならいいってもんじゃないですね。

先生 うん、それはそうだが、まず偏差値を見ないことには話にならないだろう。この志望校ランク一覧表を渡しておくから、おうちの人とよく相談してきなさい。

(音楽) (暗く沈んだ感じ)

ナレーション 光陽大付属の推薦入学が取り消しになったことは、確かにショックだった。推薦があるからと、ほかの子のように受験勉強にそれほど必死じゃなかったのも事実だ。でもそれより、もっとあたしが打ちのめされたのは、取り消しの理由が、生徒会活動だったということだ。あたしが、中学3年間で一番充実していると感じられた、そして自分たちで自主的に働きかけ、既成の決まりを変えていく喜びを初めて味わい、活動を通して本当の仲間と巡り会えた、あの生徒会での1年間。それが受け入れてもらえないのなら、人のやらない活動をしたというだけで門を閉ざすのが高校なら、そんなとこ、こっちからお断りよ。—そんな気持ちだった。高校に入ったら、また卓球で思い切り汗を流したい、そんな思いで選んだ学校だったのに、それが見事につぶされた今、あたしの進む道は、先生の言うように、ただ偏差値だけで志望校を決めるしかないんだろうか？ “内申の平均 4.3、偏差値64”、これが高校に行くためのあたしのすべてなんだろうか？ うん、違う、そんなはずはない。

用意されていた目の前の道が閉ざされてみて初めて、あたしは”高校受験”という今の自分にとって最も重要な、そして当然のように思っていた問題について考えた。一人で考えに考え、そしてあたしはある結論を出した。

#### <後編> 受験地獄の向こう側

ナレーション あたし、遠藤操。青春中学3年。ついこの間まで、生徒会長を務め、忙しいけど充実した毎日を送っていた。ところが、推薦入学が決まっていた高校から、取り消しの通知。理由は、生徒会長時代に、学校の規則を変えるための活動を積極的にやりすぎたこと。「うちの校風に合わない」と断られたのだ。

(効果音) (チャイム)

先生 じゃ、これで終わる。あ、遠藤と二宮、あとで職員室に来なさい。

(効果音) (放課後のガヤ)

二宮頼子 ちよっとお、遠藤さん。あんたとあたしが呼ばれるってなんだろうね。元生徒会

長の優等生と、落ちこぼれの取り合わせ。

操 言っとくけど、二宮さん。あたし、優等生なんかじゃないわよ。問題児だからって、行きたかった学校に振られてるんだから。もっとも、そんなとこ、こっちから願ひ下げだけどね。

頼子 何言ってるの？ 冗談だろ？

操 本当よ。先生の話、聞かなくても分かってるんだ。この間の志望校調査、あたし、白紙で出しちゃったからね。

頼子 ウソ。まさか…。あんたみたいに成績がいい子が、まさか。

(音楽) (ブリッジ)

先生 お前みたいに成績のいい者が、まさかこんなことをするとは。先生には信じられんよ。どういことなんだ。第1志望、なし。第2志望、なし。第3志望、なし。え？ 説明しなさい。

操 どうって、そこに書いたとおりです。

先生 書いとらんじゃないか、何も。

操 だから、“なし”です。

先生 まさかお前、受験しないとでも言うんじゃないだろうな？

操 そうです。

先生 「そうです」？ この間の付属進学がダメになったことにこだわっているのか？ あれは気の毒だった。しかしほかの者は皆、これから受験するために、今、必死に頑張るとるんじゃないか。お前だけがそんな甘えた態度でどうするんだ。

操 あたし、自分なりに考えてみたんです。何のために高校へ行くのかって。あたしは、中学生活、特に生徒会の活動で、友達とか、先輩や後輩と一緒にあって、いろんなことにぶつかって行って、自分たちの環境を変えていったり、一つのことを成し遂げたりっていうすばらしさを知りました。だから、高校に入ったら、もっといろんなことに挑戦したいと思ってました。でも、高校って、そんな生徒は歓迎しないんですよ？

先生 それはだ、たまたま光陽女子がそうだったということだ、だからと言って…。

操 (さえぎる)いいえ、先生。あたし、あのあと、少し調べてみたんです。先輩にも話を聞いたりして。そうしたら、進学校は、どこも”受験受験”ってそればかりで、学校になんでも管理されてるっていうし、そうじゃないところは、自由って言うより、先生たちがもう無関心って感じで、みんな適当なことやってるそうです。それに、義務教育じゃないから、ヘンな風に学校に逆らったら退学だっていうし、退学になるくらいだったら、最初から行かなくても同じなんじゃないですか？

先生 遠藤。そんな、入学前から退学になると決め付けるやつがあるか。

操 それに先生、さっき「甘えるな」っておっしゃいましたが、あたし、勉強がイヤになったわけじゃありません。もっといろんなこと知りたいし、そのためには大学に

も行きたいんです。だからあたし、“大検”を目指そうと思ってます。

先生 “大検”？ ああ、大学入試のための資格検定か。お前、そんなことまで考えていたのか。しかしな、お前の考えは飛躍しすぎた。冷静に考えてみろ。これでお前の学力が足りないというのなら話は別だ。二宮のように、高校進学が明らかに無理な者もおる。

操 二宮さん、進学しないんですか？

先生 あいつは、それこそ学力が足りなくて、行けないんだ。それに、2年の時は、かなり荒れていて、警察にも何度かお世話になったからな。まあ本人も先生も、あきらめがつく。しかし、みすみす受かると分かっているのを放棄するというのは、どうだ？ もったいないじゃないか。(FO)

ナレーション あたしの気持ちは、結局、先生には分かってもらえなかった。けれど、なんと言われても、あたしの決心は変わらない。

頼子 ちよっとお。

操 二宮さん。待っててくれたの？

頼子 待ってたってわけじゃないけどさ。どうだったのよ、先生のほう？

操 うん、はっきり言ってきたよ。「高校行かない」って。あたし、大検受けるつもりだから。

頼子 何、その“ダイケン”って？

操 大学受験の資格を取るための、検定試験。あたし、勉強そのものは嫌いじゃないし、大学にも行きたいけど、今の制度だと、高卒の資格がないと大学入れないのよ。だから、高校中退や中卒の子は、まず“大検”受けるの。それに受ければ、高卒程度の学力ありと認められるわけ。

頼子 何もそんなめんどくさいことしなくたって、あんたなら、入れるとこいくらでもあるんだろ？

操 あたし、今、本当に行きたいと思える高校ってないの。それなのに、みんなが行くからって行っても、無意味でしょ。

頼子 そうかもしれないけど、でも、あんた、そういうのってカッコよすぎるよ。ぜいたくだよ。行きたくても、どこにも入れないやつだっているのに。

操 二宮さん。あなたこそ、本当は、高校行きたいんじゃないの？ 先生には「あきらめた」なんて言っても。

頼子 そりゃ…。そりゃあ、あたしだって、行けるもんなら行きたいよ。だけど、今まで遊んでたから、ほんと、頭カラっぽだし、先生だって、もう最初っから受験は無理だって感じで言うから、しょうがないじゃん。

操 何言ってるの。自分こそ、行きたいならはっきりそう言わなきゃダメじゃない！ 先生にイヤミ言われようと、自分の進路なのよ。ダメかどうかなんて、受けてみなきゃ分かんないじゃない。まだ3か月ある。やるだけのこと、今やっとなきゃ、

後悔するわよ。あとになって、“本当は、頑張れば入れたかもしれない”なんて思うの、ヤじゃない。悔しいじゃない！

頼子 う、うん。そりゃ…。でも、いまさら無理だよ。あたしは、あんたとは頭の出来が違うんだ。今から少しやっつくらいじゃ…。

操 (鋭く) やりもしないで何言ってんのよ！ いいわ、あたし、手伝ってあげる。今日からもう死ぬ気でやるのよ！ いいわね?!

頼子 う、うん。

ナレーション こうして、あたしと二宮頼子の猛勉強が始まった。“受験しない”と決めたあたしが、人に受験勉強を教えるというのもヘンな話だけど、先生からも親からも、“受験から逃げてる”という目で見られるのがイヤだったあたしは、“頼子の家庭教師役が自分の受験勉強だ”という思いで、打ち込んだ。始めてみると、分かりやすく教えるというのは案外難しく、自分で理解しているつもりでも、うまく説明できなかつたりして、二人で遅くまで頭をひねる毎日が続いた。

操 ほら、また“s”つけるの忘れてる。“三単現は S”なの！ 主語が He とか She とか三人称の単数で現在形だったら、動詞に必ず“S”をつけるって言ったでしょ！

頼子 でも、He って言ったら一人じゃん。それが何で“三人称”って言うのよ。へんなの。

操 (あきれて) あのねえ…。(ため息) そんな、頼子みたくいちいち「なんで」「なんで」なんて言ってたらねえ、時間がいくらあっても足りないの。今はとにかく理屈抜きで覚える！ 英語が一番足引っ張ってんだから。偏差値あと 5 は上げなくちゃなんないんだからね。

頼子 あーあ、あんたまで、先生みたいなこと言ってくれちゃって。

操 ちよつと。あたしがいつ先生みたいなこと言ったのよ。あたしはね…。

(効果音) (ドアのノック音)

頼子の母 頼子、入るよ。

(効果音) (コーヒーカップの音)

母 まあ、いつもすみませんねえ、操さん。

操 いいえ。あ、お構いなく。

母 本当にねえ、この子がこんなにやる気になってくれるなんてねえ。お宅みたいなよくできる人が、仲良くしてくれて、ありがたいねえ、頼子。

頼子 いいから、おかあちゃん、お菓子置いて、あっち行ってよ。

母 なんだよ。人を邪魔にして。いえね、この子が一時グレたりして、悪い友達と遊び回ったりしてたころは、もうどうなることかと、母ちゃんほんと、心配してたけどさ、こうして立ち直ってくれて、これも神様のお導きだねえ。

頼子 また出ました、母ちゃんお得意の「神様のお導き」。

操 おばさん、何か拝んでるんですか？

母 いえね、最近、柄にもなく教会なんかに行ってるんですけどね。

頼子 母ちゃんなんか、全然キリスト教って柄じゃないって言ってんのにさ。

母 うるさいね、この子は。いいだろ。顔で拝むわけじゃなし。それでね、ああいうとこの牧師さんってのは、やっぱし、いいこと言うねえ。こないだもね、え〜と、あたしや覚えが悪くてね、だから、いい話聞くと書き付けとくことにしてんですけどね、(ポケットをゴソゴソ探し、メモを取り出す)、あったあった、「あなたは、わたしの目には高価で尊い。」―「わたし」ってのはね、神様のことでね、「あなた」ってのは、なんと、あたしらのことだったのよ。だからさ、この言葉はね、「母ちゃんは、神様の目から見て、すごく値打ちがある」ってことなんだよ、お前！

頼子 何一人で感動してんの？ ったく、単純なんだから。

母 いいだろ。操さんね、あたし、こないだまで、この子に顔見りゃ「バカ」だの「不良娘」だの言ってきたでしょ。でも考えてみりゃ、あたしの娘だからね。そんな出来がいいわけないのにね。この子の場合、たまたま勉強ってやつが性に合わないだけで、まあいいところが全然ないわけじゃなし。あたしみたいに、学のないもんでも根、「値打ちがある」なんて見てくれる神様がいるって聞いたらね、この子にばっかし「バカだ、バカだ」って言えなくなってしまっただけ。

ナレーション あたしは、そういう頼子のお母さんの顔を見て、彼女を見るその目が、なんとも言えず優しそうなのに改めて気づいた。

操モノローグ そうか。頼子にはこのお母さんがいるんだ。勉強のほうはゼンゼンだけど、このごろ頼子がほんとに落ち着いてきたわけ、これで分かったよ。でも、お母さんがそういう風に変ったのは、あの牧師さんの話でしょ？ 「神様にとっては、綿日はとても大切だ」ってことでしょ？ なんか、神様ってすごいな。

頼子 ちょっと、何人の顔ポーっと見てんの？

操 ん？ なんでもない。あんなお母さんいて、頼子、捨てたもんじゃないよ。さ、頑張ろう！

ナレーション そう言いながら、あたしは、今まで自分が知らなかった世界、でも心の奥で必死に求めていた世界が、少し開けてきたような、不思議な胸のドキドキを感じていた。それは、テストの点も、偏差値も関係ない、すごくさわやかな心の世界だった。

<完>